『週刊ポスト』2019.10.21(A)発売号

名曲カルテ

昭和歌謡といつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦

第96回 元バンドボーイとバンドリーダーの人生の絆

私が小学校低学年の頃ですから、昭和35年当時のことでしょうか、近所の上級生がポケットに手を突っ込んだままケンケンパーをやりながら守屋浩の『僕は泣いちっち』を口ずさんでいました。上級生は中学生になると、今度は制服姿で守屋浩を気どるように『大学かぞえうた』をすかしながら歌っていましたが、東京五輪開催を前に、住んでいたアパート（空襲で焼け残った建物）が取り壊されることになり引っ越していきました。長馬跳び、悪漢探偵、缶蹴りなど、お金のかからない遊びがまだ残っていた時代の話です。

昭和33年から始まった「日劇ウエスタン・カーニバル」で、スイング・ウエストのリーダー兼ギタリストとして活躍していた堀威夫は、昭和35年秋、バンドマン生活に別れを告げ、守屋浩、田辺昭知（現・田辺エージェンシー社長）らを伴い、自らの芸能プロダクションを設立、経営者としての道を踏み出します。堀プロ（現・ホリプロ）の誕生です。

堀プロ設立後も歌手・守屋の勢いは止まらず、昭和35年から翌年にかけて浜口庫之助の作詞・補作曲・編曲による『有難や節』をヒットさせ、同37年には『大学かぞえうた』『学生小唄』『学生節』と学生イメージを植えつけるような伝承歌謡で人気を保持、学生服のイラストに頭部のみ本人写真をはめ込んだシングル盤のジャケットで男っぽさを強調した影響でしょうか、中高生男子が口ずさむまで守屋人気は広がりました。

翌38年初頭、堀は愛知県出身の歌の上手な男子高校生をスカウトします。当時、『若いやつ』の歌と同名主演映画がヒットしていた橋幸夫の大学生に対抗するがごとく、その新人歌手に学生服を着せてデビューさせます。舟木一夫と『高校三年生』の登場です。

老若男女を問わない舟木の人気は、むしろ橋との相乗効果によって日を追うごとに上昇、皮肉なことにそれに反して学生服姿を印象付けていた守屋の人気に影が差してくるようになり、NHK紅白歌合戦への出場も同年暮れの『がまの油売り』で途絶えました。

昭和51年、37歳になっていた守屋は歌手としての第一線を退き、ホリプロの宣伝部長として堀を陰から支える立場に代わります。歌手時代に、堀が20代でギターを置き裏方に回ったことを目の当たりにしている守屋の転身への決断は、その後のホリプロ躍進の一助になったことでしょう。スカウト部長として榊原郁恵らを発掘、タレントスカウトキャラバンを定着させていきました。

その昔、堀威夫が結成したスイング・ウエストのバンドボーイとしてこの道に入って以来、ホリプロ草創期の社業を支えたことは、歌手・俳優としての実績とともに、特筆されることです。歌の世界だけに限っても、スパイダース、ヴィレッジ・シンガーズなど数多くのGSバンドはもとより、和田アキ子、森昌子、山口百恵、石川さゆり、そして井上陽水、忌野清志郎、浜田省吾らのシンガーソングライターの輩出は偶然ではなく、ホリプロという受け皿があってこそのデビューだったのだと思います。

ほりい・ろくろう　昭和27年東京都生まれ。慶應義塾大学文学部卒業後は25年にわたる出版社勤務を経て独立。現在は出版社経営の他、ライターとしても活躍。『私的「昭和大衆歌謡考」』第4集『しあわせになろうね』（グスコー出版）が好評発売中